The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	メルロ=ポンティにおける社会的な生の優位
Author(s)	川崎, 唯史
Citation	メタフュシカ. 2015, 46, p. 59-71
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54514
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

メルロ=ポンティにおける社会的な生の優位

川崎唯史

はじめに

本稿の第一の目的は、メルロ=ポンティの間主体性の哲学において、他者との一対一の関係に対して、多数の他者との共存つまり社会的な生が優位をもつことを示すことにある。『知覚の現象学』を中心に前期の著作の検討を通してこの点を述べた上で（第一節－第三節）、第二の目的として、社会的な生の暴力的な本性を明らかにすることを試みる（第四節）。

本稿の目的設定は次のような先行研究の状況によって動機づけられている。まず、メルロ=ポンティのいわゆる他者論として考察されるテクストは、私による他者の知覚、つまり伝統的には他我認識と呼ばれる問題を扱う箇所であり、その他の論述は二次的なものとして軽視されている。言い換えれば、対化や感情移入といった概念を用いたフッサールの他我構成に関する記述や、シェーラーの共感論を受けて書かれた部分がメルロ=ポンティ研究においても核心的なものとされている[1]。なるほど、メルロ=ポンティが他我認識論ともみなせる考察を展開していることを否定する余地はない[2]。しかし、伝統的な他者論の枠組みの中でメルロ=ポンティの論述を扱うことによって、そもそも彼が何を目指して他者の問題を取り上げたのかを問う視座は失われる。本稿の第一節では、主著『知覚の現象学』の検討によって、メルロ=ポンティのいわゆる他者論がどのような目的地への途上にあるのかを明らかにする。この作業を通じて、一人の他者との対面的な関係をモデルとする他我認識ではなく、複数の他者との共存である社会的な生という次元を考察することがメルロ=ポンティの眼目であることを示す。

次に、メルロ=ポンティの記述する他者との関係は、確執のない平和なものであるか、そもそも自他の区別がない合一の状態であるとみなされている。この点についてはレヴィナスやデリダ

1　こうした傾向はたとえばバルバラスによる『知覚の現象学』の他者論の扱いに顕著である（Barbaras 1991, pp.37-58）。

2　代表的な議論として、『知覚の現象学』の「他者と人間的世界」、『世界の散文』の「他者の知覚と対話」、「幼児の対人関係」、『シーニュ』所収の「言語の現象学について」と「哲学者とその影」、『見えるものと見えないもの』の「絡み合い――キアスム」が挙げられる。

のように他者の他性を重んじる立場からの批判の影響が大きいが[3]、日本では高橋哲哉による厳しい批判――ここでは特に、メルロ=ポンティが「〈根源的自然〉における自己と他者と世界とのコミュニオン」[4]をあらゆるコミュニケーションの原理としているという点への批判――がこうした理解を一般的にするのに寄与したと思われる[5]。しかし、本稿の第四節で行うように、歴史的･社会的な次元が組み込まれた対人関係の記述を見れば、こうした理解は一面的であり、いくつかの点では誤ってもいることが明らかになる。それでもなお他性を重視する立場からの批判が可能であることは確かだが、どの点に関してその批判が最も深刻になるのかを見定めることは重要だろう。他者の問題が歴史の問題に直結しているばかりか、その一部でさえあることを踏まえなければ、メルロ=ポンティの他者論なるものの特徴であると同時に問題でもある論点を把握できないのである。

１．他者論の位置づけ

本節の目的は、メルロ=ポンティが何を目指して他者の問題を取り上げたのかを明らかにすることである。

まず、『知覚の現象学』の「他者と人間的世界」の章を検討しよう。メルロ=ポンティは確かにこの章の大半を割いて「他者の構成」の問題を考察しているが、それは何のためだろうか。「どのように私は他の〈私〉たちがいることを知りうるのか」（PhP 400）という他我認識の問いが発せられる前後の文脈を見てみよう。この段落で最初に問われるのは、道具や家といった人間の生活の沈殿物からなる「文化的世界」を私がそれとして知覚することはどのように可能か、ということである（ibid.）。この問いに対して、他者が道具を使っているのを見て、私自身の行為から類推して他者の行為を解釈することによってだと答えた上で、ではその知覚はどのように可能なのか、という流れの中で、上の他我の問いが提出される。つまり、他者の知覚の分析は、文化的世界の知覚という問題を解決するために要請されているのである[6]。

それ以上に重要なのは、他我の問いが出された後の論述である。メルロ=ポンティは、他者の知覚には還元できない別の問題があることを指摘する。

> 他者の構成は、社会の構成を全面的には明らかにしない。社会とは、二人や三人での実存ではなく、不特定多数の意識との共存である。（PhP 401）

---

3 Cf. Levinas(1997), pp.131-156 ; Derrida(2000), ch.9. デリダによる批判については加國（2007）および藤本（2009）を参照。

4 高橋(1992), p.136. これに先立って港道隆も、「メルロ=ポンティにおいては〈存在〉は、人間と世界、人間と人間との普遍的共存、〈予定調和〉を保証し、あらゆる暴力や死は二次的である」と述べていた（廣松・港道 1983、p.176）。

5 松葉祥一は高橋の批判が「とりわけ痛烈だった」と述懐している（松葉 2010、p.8）。

6 文化的世界の問題は、前著『行動の構造』（1942）において、本来の人間的行為を名指すために、「物理的および生物的自然を変容する人間活動の総体を指す「労働」というヘーゲルの用語」を用いた時点からメルロ=ポンティの関心事であった（SC 175-176）。「マルクス主義と哲学」（1946）では、「のちに現象学が取り上げ直し展開することになった「人間的対象」という概念を導入する仕事がマルクスに約束されていた」と述べられ、彼にとって文化的世界の問題はマルクス主義と現象学の結節点であることが明示される（SNS 159）。

他我の問いに答えることで明らかになるのは、「二人での実存 une existence à deux」か、せいぜい三人でのそれにすぎない。それゆえ、他者知覚の分析は、そのまま文化的世界――すなわち、ここで「不特定多数の意識との共存」と規定されている「社会」――の構成分析だというわけではない。メルロ=ポンティが多くの紙幅を割いて他我の問いに取り組むのは、あくまでその考察が「文化的世界が引き起こす原理的困難」(ibid.)に突き当たるからである。まとめると、1)他者の構成は文化的世界あるいは社会の構成を解明するために要請されるが、2)後者は前者に還元できない独自の特徴を備えている。

それゆえ、メルロ=ポンティは他者知覚の分析を終えると、すぐさま次のように述べる。

> したがって、私たちは自然的世界に続いて社会的世界を再発見しなければならない。対象または対象の合計としてではなく、永続的な領野または実存の次元として再発見しなければならない。私はなるほどそこから背を向けることはできても、状況づけられるのをやめることはできない。(PhP 415)

ここでも上述の二点がメルロ=ポンティの念頭にある。つまり、1)「したがって」とあるように、他者の構成分析は社会的世界(文化的世界)の構成を問うためになされているが、2)にもかかわらず社会的世界の問題は解決済みではなく、むしろこれから「再発見」すべきものと考えられている。

ここで当然、次のような反論が出るだろう――メルロ=ポンティが社会の構成を明らかにするために他者の構成を論じたという見方は成り立つとしても、実際のところ「他者と人間的世界」の章は他者知覚の分析にほとんどの段落が割かれており、社会的世界の問題が論じられているのはわずか一段落にすぎないのだから、結局は他者の問題が社会の問題より重要なのではないか。なるほど、もし社会に関する分析がこの章に尽きているとしたら、こうした反論にも理があるかもしれない。しかし、ことはそう単純ではない。

2. 社会的なものの促し

『知覚の現象学』において社会の問題に取り組むメルロ=ポンティの基本方針は、次の一文に示されている。「私たちは、私たちが実存するというただそれだけのことで私たちが接触しており、あらゆる対象化以前に私たちが自分に結びついたものとして身につけている社会的なものに立ち返らねばならない」(PhP 415)。つまり、思考の対象としての三人称的な社会ではなく、主体が非反省的な水準でつねに生きている「社会的なもの le social」を考察するという方針である。

では、社会的なものはどのように生きられているのか。私見では「動機づけ」と「性質づけ」という二つの様態が記述されているが、メルロ=ポンティがはっきりと主張するのは前者である(後者については第四節で検討する)。「意識の把握に先立って、社会的なものは密かに、促しとして存在する」(ibid.)。次の段落で「社会的なものの存在様相の問題」が「外的なものと内的なものの間にある動機づけの関係」の問題に結びつくと述べられているように(PhP 417)、「促し

sollicitation」は「動機づけ motivation」の同義語である（cf. PhP 305）。メルロ=ポンティのいう動機づけとは、諸事象間の客観的な関係を指す「原因」と、意識が言語を用いて顕在的に構成する「理由」との二者択一をのり越える「現象学的概念」であり、現象から非定立的な意識に提示される「意味 sens」が主体の取り上げ直しによって実現されるという関係を指す（PhP 61）。社会的なものと主体の関係についても、メルロ=ポンティはこの概念を用いて考察しようというのである。

さて、メルロ=ポンティが促しという観点から社会的なものの問題に取り組んでいることが明らかになったいま、メルロ=ポンティは社会の問題に対して「他者と人間的世界」の一段落しか割いていないとみなすことはもはや不可能である。なぜなら、社会的なものの促しを論じた箇所は、他の章にも見出されるからである。まず予備的なものとして、「性的存在としての身体」の末尾に付され、目次にも「弁証法的唯物論の実存的解釈についての注」と特記されている注が挙げられる。そこでメルロ=ポンティは、歴史を経済に還元する因果的な定式化に抗して、史的唯物論を「歴史についての具体的な考え方」として理解する立場を表明している（PhP 200）。メルロ=ポンティとマルクス主義の関係を考える上でも重要な部分だが、本稿の主題との関連で注目すべきは次の箇所である。

> この意味では、純粋な経済的因果性など決して存在しない。というのも経済とは、一つの閉じたシステムではなく、社会の全体的かつ具体的な実存の一部だからである。しかし、歴史の実存的構想は、経済的状況からその動機づけの力を奪うものではない。実存とは人間が事実的状況を自分なりに捉え直し引き受ける不断の運動であるとすれば、その思考のいかなるものも、自分の生きている歴史的文脈から、とりわけその経済的状況から、まったく切り離されることはありえないだろう。経済が閉じた世界ではなく、歴史の中心ですべての動機づけが結びついているからこそ、外的なものは内的になり、内的なものは外的になるのであって、私たちの実存のどのような構成要素も決してのり越えられることはありえない。（PhP 201、強調は原文）

主体とその社会的状況が動機づけという関係にあること、そしてこの関係の解明によってこそ外的なものと内的なものの二分法を破りうることが主張されているが、これは上で見た「他者と人間的世界」の議論を先取りしている。とはいえ、この注でも、社会的なものの促しが詳しく記述されているわけではない。

社会的なものの動機づけに関する立ち入った考察は、「自由」の章の中核たる「私たちと歴史の関係」（PhP 505）を論じる諸段落にこそ見出される。その精査は本稿の課題ではないので、ここでは概観に留めよう。問題となるのは「階級意識」であり、これを労働者の客観的諸条件から因果的に説明する客観的思考と、自分の身分についての労働者の意識に還元する観念論的反省の双方とも階級意識を解明しえないと批判した上で、労働者の具体的な経験すなわち「実存的投企」（PhP 509）から階級の自覚と蜂起への決断が結晶する仕方を明らかにすることが目指される。そ

の仕方を端的に表すのが、「私の決断は私の生の自然発生的な意味を取り上げ直す［……］」（PhP 511）という定式である。観念論と客観的思考は「動機づけという関係」（ibid.）を無視するがゆえに階級意識を把握できないと述べているように、メルロ=ポンティは明らかにこの意味の捉え直しを動機づけとして理解している。

このように、「他者と人間的世界」で提示された社会的なものの促しという問題は、「自由」の章で集中的に議論されており、メルロ=ポンティはこれを軽視しているわけではまったくない。とはいえ、なぜ社会に関する議論が「自由」の章に持ち越されたのかという疑問は残る。疑問を晴らすべく、この章を概括しておこう。まず、全面的な自由か不自由かの二者択一を乗り越えるべく、「もし行為の回路というものがなければ、つまり、ある完成を呼び求め、決断の地として役立つような状況がなければ［……］、自由は決して生じない」（PhP 500）こと、つまり「場をもたない自由はない」（PhP 501）ことが主張される。この自由はさらに、前人称的な実存による現象への自然発生的な価値づけとして肉づけられるが、その段落は「誰が動機に意味を与えるか」と題されている。このように、メルロ=ポンティは自由を個体に内属する能力のようなものとしてではなく、主体と世界の間の非定立的な動機づけの関係として論じている。「私は自由であり、しかもこれらの動機づけがあるにもかかわらず、またはこれらの動機づけの手前で自由なのではなく、これらの動機づけを手段として自由なのである」（PhP 519）。

見方を変えれば、第一部・第二部では身体や世界を記述するための概念にすぎなかった動機づけが、主体と世界の関係としての自由を表現する鍵語に転じたと言うこともできる。そしてこの転換は、第一部と第二部はそれぞれ知覚する身体と知覚された世界を主題とするのに対して、第三部は主体性の解明を任とするという『知覚の現象学』の構成に沿うものである[7]。先の疑問はこうした観点から解決できる。つまり、メルロ=ポンティは（少なくともこの時点では）、主体に備わる社会的なものという仕方で、社会の問題を世界の問題系にではなく主体性の問題系に帰していたために、第二部の「他者と人間的世界」ではなく第三部の「自由」で論じたのである。それゆえ、『知覚の現象学』に関して、社会的世界の構成分析にうまく取り組めなかったという不備を指摘することは正当であるが、社会の問題を他者の問題よりも軽視しているとみなすことは不当である。

以上をまとめると、『知覚の現象学』においては、1）他者の問題は社会の問題を考察するために要請されており、2）社会の問題は社会的なものの動機づけとして、つまり社会的世界ではなく主体の社会性として論じられていた。ここから、メルロ=ポンティの主眼は他我認識よりもむしろ社会性の解明にあったと主張することはできるだろう。しかし、本稿の主張を正当化するためには、これだけでは足りない。より積極的に、メルロ=ポンティが一対一の自他関係を多数の他者との関係に比して特権視しておらず、むしろ後者に優位を与えていることを示す必要がある。

7　コレージュ・ドゥ・フランスの教授に立候補した際に書かれた「資格と業績 教育計画」（1952 年）において、メルロ=ポンティは『知覚の現象学』第三部の目的について次のように述べている。「知覚する身体と知覚された世界についてのこうした二重の分析が認められるとすれば、この分析が私たちの主体や精神の構想を手つかずのままにしておくことはありえないだろう。私たちは、このように記述される諸現象が可能であるためには、主体の本性がどのようなものでなければならないかを自らに問う必要がある」（PD 20）。

次節ではこの課題を遂行することで、本稿の第一の目的を達成したい。

３．社会的な生の優位

先述したように一人の他者を知覚するという現象は、それが文化的・社会的世界に関する「原理的困難」を提示する限りで分析されるのであって、それ以上の重要性が与えられているわけではない。むしろ逆に、一対一の関係は多数の他者との共存の特殊例にすぎないという見方であれば、複数のテクストに見出される。その最も明確な表現は、『見えるものと見えないもの』の「問いかけと弁証法」において他者の問題を論じる箇所に付された注に含まれている。サルトル的な「負的なものの哲学」は他人の問題を「他者なるものという問題」（VI 111n.、強調は原文）の形で、つまり一対一の純粋な自他関係において立てると指摘した上で、メルロ=ポンティは次のように述べる。

> おそらくは、負的なものの哲学の慣用の順序を逆にして、他者なるものの問題は諸々の他者という問題の特殊例にすぎず――誰かとの関係はつねに第三者との関係によって媒介されているのだから――、第三者たちもお互いどうしの間に、それぞれに違った第三者との関係ができ上がるような関係をもっており、そしてこのことは、生の初めに遡るほどに遠くまで及ぶ――オイディプス的状況もやはり三角関係なのだから――とさえ言わなければならないだろう。ところで、ここで問題になるのは単に心理学ではなく、哲学――他人との関係の内容ではなく、その形式と本質の――でもある［……］。（VI 111-112n.、強調は原文）

純粋な二者関係なるものはなく、つねに第三者の媒介があるという発想は後期になって初めて生じたわけではない。この考えが前期から一貫してメルロ=ポンティにあることは、同じ注で言及されているボーヴォワールの『招かれた女』を論じた「小説と形而上学」（1945）を見れば明らかである。ここでメルロ=ポンティは、哲学と同様に「世界の経験」を主題とし、それに語らせることで「人間のうちなる形而上学的なもの」を明らかにしようとする「形而上学的文学」として『招かれた女』を評価しているが（SNS 36-37）、この基本姿勢は、他人との関係の形式と本質を問う哲学を心理学から区別する先の引用でも維持されていると言える。そして、この文章は「間主体性の理論」（PD 42）に触れているとゲルー宛ての書簡にあるように、主題となるのは小説に登場する三人の関係である。フランソワーズとピエールのカップルは当初、一切の相克を欠いた透明な「二人での存在 l'être à deux」（SNS 39）を形成しているかに見えたが、前者の教え子のグザヴィエールが後者と付き合うことによって、二者の寛大さが隠蔽していた裂け目を含む「形而上学的なドラマ」（SNS 41）が開示される。結果として明らかになるのは、外から見られることのない二者の純粋な共同性が自足することは不可能であり、第三者のまなざしによる媒介は避

けられないという間主体性の本質である[8]。

> ただ、私たちの行為はすべて多数の意味、とりわけその行為が外部の目撃者に供する意味をもっており、私たちはそれらの意味をみな行為しながら引き受けている。というのも、他者たちは私たちの生の恒常的な座標だからである。彼らの実存を感じる瞬間から、私たちは彼らに私たちを見るという途方もない力を認めるがゆえに、とりわけ彼らが私たちについて考えているところのものであるように拘束される。（SNS 47、強調は原文）

多数の他者との共存を一対一の対面よりも優位に置くというこの発想は、『知覚の現象学』では明確な仕方で示されていないと言われるかもしれない。しかし、そのことをもって一対一の関係を記述する他者論のみを間主体性に関する議論とみなすのは当たらない。むしろ、間主体性についての『知覚の現象学』の最後の言葉は、「私が構成するのではない意味」（PhP 512）が外から私の実存に与えられるという、先の引用で強調された事態を必然的なものとして主体の構造に書き込んでいる。

> 絶対的な主体性が私自身の抽象的な概念にすぎないのと同様に、対象としての他者はそのうわべの様態にすぎない。したがって私は、最も徹底した反省においてさえもすでに、私の絶対的な個体性のまわりに、一般性の辺暈のようなもの、あるいは「社会性」の雰囲気のようなものを捉えていなくてはならない。あとになって「ブルジョア」とか「人間」という言葉が私にとってある意味をもちうるのでなければならないとすれば、このことが必要なのである。私は一挙にして私を私自身に対して脱中心的なものとして捉えていなければならないし、また私の単独的な実存は、いわば自らのまわりに性質をもった実存を拡散していなければならない。（ibid.）

後述するように、主体性には個体性と一般性の二側面がある。社会的世界が再発見された後では、一般性には身体的なものだけでなく、社会的なものも含まれる。それは例えば、ブルジョアや労働者といった階級に属しているという一般性である。こうした一般性としての社会性は、それを私が後に自覚し引き受けることになるとしても、まずは私の実存に付与されるものであって、私が無から創造するものではない。こうして、メルロ=ポンティにとって「厳密な意味での間主体性」（ibid.）とは、主体の実存がその意図にかかわらず社会的な生の中で何らかの意味をもたざるをえないことを指す概念なのである。

なお、念のために確認しておくと、こうした一般性の媒介は「私たちが実存するやいなや」（PhP

---

[8] 『見えるものと見えないもの』での議論を踏まえると、「小説と形而上学」はボーヴォワール読解の形をとった迂遠なサルトル批判だったと見ることが可能であるし、「実存主義論争」（1945）における「社会的なものについての理論を『存在と無』はまだ与えていない」（SNS 100）という発言を鑑みれば、社会的な生をめぐる論述の一切がサルトルとの対抗関係の中で生じたとも考えられる。E. ドゥ・サントベールはサルトルやボーヴォワールとの関係から「蚕食」概念の生成を緻密に論じている（Saint Aubert 2004）。

514）生じるのであって、他我認識から導出されるわけではない。問題は主体が社会の中に特定の外面をもって状況づけられていることであって、意識による社会の構成ではないからである。そして当然、他者との関係は、それが二者関係であろうとなかろうと、個々の主体がもつ社会性によって、その純粋さを初めから奪われていることになる。それゆえ究極的には、『知覚の現象学』においても、一対一の関係には方法論的な意義を除けば特別な重要性は認められておらず、社会的な生の一局面にすぎないと言えるだろう。

1959 年の講演「実存の哲学」でメルロ=ポンティは、1930 年代から 1945 年までの哲学の動向を振り返りつつ、こうした意味での社会的な生の優位について、他者のテーマと歴史のテーマの関係という形で明確に語っている。

> この他者の問題は後にもう一度取り上げるつもりですが、そこには現在に至るまでフランス思想の中で次第に重要度を増しているテーマが加わります。つまり歴史のテーマですが、これは結局、他者のテーマと同じものです。哲学者たちを歴史の中に引きつけたりつまづかせたりするものはまさに人間の条件なのですが、それは、人間が独りでいるのではなく、他者たちと向かい合っているときに、彼らとの並外れて複雑な関係の中で作られます。この複雑な関係によって、私たちはもはや並置された諸個人と関わるのではなく、一種の人間的織地、時に集団性と呼ばれる織地と関わります。（PD 256-257）

このように、メルロ=ポンティの思考において、複数の他者との共存としての社会的な生という主題は、一対一の自他関係をその特殊例として包括するものであり、また叙述の順序においては他者の問題を通って到達すべき最終地点であると言うことができる。もちろん、こうした考えは他者を歴史という全体性に回収するものであり、他者の他性を無視していると批判することは可能であるし、必要でさえあるだろう[9]。しかし本稿では、その前に、歴史の中に位置づけられた他者たちとの関係がどのように記述されるのかを検討してみたい。その作業は、メルロ=ポンティの主張を肯定するためではなく、彼の記述が暴露する社会的な生の本性を知るためにこそ求められる。

４．社会的な生の記述

本節では、メルロ=ポンティが社会的な生にどのような特徴を認めたかを検討する。まず『知覚の現象学』から始めよう。そこで社会的なものの促しという現象が記述されていたことをすでに私たちは確認した。この現象はその後の著作でも繰り返し取り上げられているが、メルロ=ポンティはまた、社会的な生がもつ別の側面にも注目している。それは「性質づけ qualification」と呼ばれる。前節で引用した、「私の単独的な実存は、いわば自らのまわりに性質をもった実存を拡散していなければならない」という言葉が示すように、メルロ=ポンティにおいて主体とは、

[9] こうした視座はたとえば、全体性を形成するものとしてメルロ=ポンティの「根本的歴史性」に繰り返し言及するレヴィナスに見出せる（cf. Levinas 1990, p.76, 114, 250, 259）。

絶対的に自由で純粋な個人ではなく、社会の中でさまざまな性質を付与された誰かである。厳密に言えば、主体とはそうした二つの契機から成り立っている。「[……] 主体の一般性と個人性、性質づけられた主体性と純粋な主体性、〈ひと〉の無名性と意識の無名性は、哲学がどちらかを選ばねばならないような二つの構想ではなく、具体的な主体というただ一つの構造の二契機である」(PhP 514-5)。

性質は、人が社会の中で成長するにつれて徐々に獲得していくようなものではない。性質に関して第一次的に問題となるのは、主体の外面性、つまり外から見た姿である。当の主体にとってみれば、性質はすでに付与されており、後から何らかの仕方で引き受けることしかできない。この点をメルロ=ポンティは次のように記述している。

> したがって私たちは、私たちの発意や、私たち自身であるところの厳密に個体的な投企の周りに、一般化された実存とすでになされた投企の地帯、つまり私たちと事物の間をさまよい、私たちを人間として、ブルジョワとして、あるいは労働者として性質づける諸々の意味の地帯を認める。自然や社会の配置が無定形なあれこれであることを止めてある状況へと結晶し、ある意味をもつや否や、言いかえれば要するに私たちが実存するや否や、すでに一般性が介入して、私たちの自己自身への現前もすでに一般性によって媒介され、私たちは純粋意識であることを止めるのである。(PhP 514)

身体をもって実存する以上、主体が外面をもつことは避けられない。またいかなる主体も特定の歴史的・社会的な事実性とともに世界に生まれてくることから、階級やネーションといった社会的な性質を与えられる[10]。したがって性質とは、「私が構成するのではない」にもかかわらず私の外面に付された意味にほかならない。

以上のように社会的なものを性質づけという観点から考察する『知覚の現象学』のメルロ=ポンティは、しかし、階級意識の自覚という形で主体がその性質を引き受ける次第を論じることに注力しており、性質づけが引き起こしうる暴力的な事態をほとんど考察していない[11]。そのため、性質づけの考察も、共同性への平和な帰属を語っているように見えるかもしれない。しかしながら、『ヒューマニズムとテロル』で性質づけが次のように再論されるときには、「社会的な生は諸々の挫折をしか伴っていない」(HT 126) という認識と、「私たちが受肉している限り、暴力は私たちの宿命である」(HT 127) という主張がともに提示されている。この宿命はもちろん、いわゆる公共の場だけでなく私的な関係にまで及ぶ。

> 愛において、感情において、友情において、私たちは、その絶対的個体性を不断に尊敬できる諸々の〈意識〉を前にしているのではなく、性質づけられた存在者たち――「私の息子」

---

[10] 社会的性質は自然に実在するものではなく、社会的世界において具体的な経緯とともに構築されたものと考えられるが、その点はここでの問題ではない。

[11] 例外は、障害者や老人が自己を「他者の眼で」見て嘆くという記述である (PhP 496)。

「私の妻」「私の友人」――を前にしているのである［……］。（HT 128）

このように、メルロ=ポンティが社会的な性質づけを論じるのは、主体と社会の宥和を示すためでは決してなく、むしろ歴史の中で否応なくお互いを位置づけ価値づけざるをえないという私たちの暴力的な宿命を明らかにするためである。主体は断じて原子的な個人ではなく、望むと望まざるとにかかわらず他者たちと不可分に結びつけられている。「主体の複数性ではなく一つの間主体性がある」（ibid.）とはその謂いであって、以下で見るようにこのあり方を共存と呼ぶこともできるだろうが、そこには程度の差はあれ必ず暴力が織り込まれているのだから、「共」の一字に平和の意味合いを読み込むことは不当であろう。

以上で、社会的な性質づけが根本において含みもっている暴力性を確認した。最後に、他者との敵対的な共存の中で性質づけがことさら侵襲的なものとして経験される場面に注目して、社会的な生の具体的な記述を検討しよう。取り上げるのは、『現代』誌の創刊号に発表された「戦争は起こった」（1945）である。第二次世界大戦前から戦争の経験までを振り返るこの文章は、「私たちは歴史を学んだ［……］」（SNS 183）と要約できる。戦前の楽観主義的な哲学は、独立した自由な諸意識の総和として社会を捉えており、個人の生と世界史の結びつきを看過していたが、戦争によって歴史の本性が暴露され、戦前の個人主義も一時的な平和に依存した考えにすぎないことが明らかになったとメルロ=ポンティは述べる。

そして、とりわけナチスドイツによるフランス占領は、共存の暴力性をありありと前景化させる出来事であった。「私たちは教育によって取り除かれていた子どもじみた振舞いをすべて学び直し、着るものによって人々［ドイツ人］を判断し、彼らのうわべだけの礼儀正しさにつっけんどんに答えねばならなかった。一瞬たりとも彼らとともに生きることなくしかし四年のあいだその傍らで生きねばならず、彼らのまなざしのもとで人間としてではなく「フランス人」として自分を感じねばならなかった」（SNS 172）。ここでは二方向のまなざしが問題となっている。両者は相手を性質（ドイツ人・フランス人）へと還元している点で共通しているとはいえ、強調点は明らかに占領軍から住民に向けられたまなざしにある。こうした経験が知らしめた社会的な生の本性について、メルロ=ポンティは次のようにまとめている。

> ［1939 年の］私たちは理解していなかったのだ、［……］共存の中にいる私たちは誰しも、自分が選んだのではない歴史性を地にして他人たちに自己を呈示し、「アーリア人」・ユダヤ人・フランス人・ドイツ人として他人に向かって振舞っているのだということを。意識には、自己を疎外し自己自身から不在になるという異他的な力があるということを。個人に関しては考えられない不条理な憎悪によって、意識は外からは脅かされ、内からはそそのかされるということを［……］。（SNS 175、強調は原文）

私たちは特定のネーションに属する者「として *en qualité* de」自己を呈示すると言うことで、メルロ=ポンティは改めて、社会的な性質への還元または「自分が選んだのではない歴史性」の全

面化が問題になっていることを強調している。それに加えて、二つの論点が明確化されている。一つは、「振舞う se comporter」という言葉から分かるように、脅かしは単に受動的な経験ではないという点である。それはきわめて侵襲的な経験ではあるが、主体の行為を導いている以上、一種の動機づけだと考えられる。もう一つは、この脅かしが異他的なまなざしのもとで「自己を疎外し」、「自己自身から不在になる」経験だという点である。『知覚の現象学』では性質づけられた実存と個人的な実存の両方が主体性に組み込まれていたが、脅かされる経験においては、個人性の側面が消失し、単なる性質をもった実存への疎外が生じる。そして、こうした不条理な事態は、お互いに切り離された個人の中ではなく、敵対を含む「共存」において、つまり「一つの間主体性」においてのみ起こる[12]。歴史性を帯び、性質づけられた諸々の主体が、対立・相克を伴いながらも共存せざるをえないこと、これが受肉した意識の宿命であり、社会的な生の本性なのである。

おわりに

本稿では、メルロ=ポンティの間主体性の哲学において社会的な生が優位をもつことを示した。まず、いわゆる他者論として重視されてきた他者知覚の分析は、それ自体で完結するものではなく、文化的・社会的世界（つまり歴史）の構成分析に寄与する限りで要請されていることを確認した（第一節）。次に、少なくとも前期メルロ=ポンティにおいては、社会の問題は社会的世界ではなく主体に備わる「社会的なもの」の問題として、特にその「促し」の観点から考察されていることを示すことで、社会の問題が軽視されているわけではないことを明らかにした（第二節）。これらの間接的な論証を踏まえて、第三節では、一対一の自他関係が歴史における複数の他者たちとの共存（一つの間主体性）の特殊例として位置づけられていることを示し、社会的な生の優位を積極的に主張した。最後に、『知覚の現象学』から『意味と無意味』まで繰り返し論じられている社会的な性質づけの問題を検討し、とりわけ敵対的な共存における「脅かし」に注目して、主体がその性質へと還元される疎外的な経験が社会的な生の本性を露呈させることを明らかにした。

これまで、他者知覚論の重視を背景として、幼児の経験を範例とする自他の平和な合一がメルロ=ポンティのいう間主体性だとされてきたが、本稿で示したように事態はむしろ逆であって、すべての生者たちが一つの間主体性を成り立たせているがゆえにこそ、暴力は避けられないのである。同じ一つの世界の中でいかなる他者とも共存するほかなく、私の実存も行為も外から意図せざる意味を受け取るという社会的な生の本性は、感情移入や共感に還元できない社会性の問題を提起している。この方位においてメルロ=ポンティの思考がどのように深められたのか、さらなる探究が求められる。

（かわさきただし　臨床哲学・博士後期課程、日本学術振興会特別研究員 DC）

12　歴史がその中の諸個人の意識や行為に還元できない一種の自律性をもつことは「人間と逆行性」（1951）でも論じられているが、この点に関する考察は別稿に譲りたい。

文献

引用に際し、メルロ=ポンティの著作については以下の略号を用いる。既存の邦訳に大いに助けられたが、訳語の統一などの事情から基本的には筆者が訳出した。

メルロ=ポンティの著作

HT: *Humanisme et terreur. Essai sur le problème communiste*, Paris, Gallimard, 1947.

PD: *Parcours deux. 1951-1961*, Lagrasse, Verdier, 2000.

PhP: *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945.

SC: *La structure du comportement*, 1942, Paris, PUF, coll. « Quadrige », 2009.

SNS: *Sens et non-sens*, 1948, Paris, Éditions Gallimard, 1996.

VI: *Le visible et l'invisible*, 1964, Paris, Gallimard, coll. « Tel », 1979.

その他の著作

Barbaras, Renaud(1991), *De l'être du phénomène. Sur l'ontologie de Merleau-Ponty*, Grenoble, Millon.

Derrida, Jacques(2000), *Le toucher, Jean-Luc Nancy*, Paris, Galilée.

Levinas, Emmanuel(1997), *Hors sujet*, 1987, Paris, Fata Morgana, coll. « Le livre de poche ».

Levinas, Emmanuel(1990), *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, 1974, Dordrecht, Kluwer Academic, coll. « Le livre de poche ».

Saint Aubert, Emmanuel de (2004), *Du lien des êtres aux éléments de l'être. Merleau-Ponty au tournant des années 1945-1951*, Paris, Vrin.

加國尚志（2007）、「彼に触れないこと、メルロ=ポンティ――デリダのメルロ=ポンティ読解をめぐって」、『メルロ=ポンティ研究』第 11 号、59-75 頁。

高橋哲哉（1992）、『逆光のロゴス――現代哲学のコンテクスト』、未來社。

廣松渉・港道隆（1983）、『メルロ=ポンティ』、岩波書店。

藤本一勇（2009）、「デリダのメルロ=ポンティ批判」、『現象学年報』第 25 号、59-69 頁。

松葉祥一（2010）、『哲学的なものと政治的なもの 開かれた現象学のために』、青土社。

付記

本稿は日本学術振興会特別研究員として文部科学省科学研究費（課題番号：14J00177）の交付を受けて行った研究の成果の一部である。

Le primat de la vie sociale chez Merleau-Ponty

Tadashi KAWASAKI

Nous nous proposons dans le présent article de mettre au jour le primat de la vie sociale chez Maurice Merleau-Ponty. Dans le quatrième chapitre de la deuxième partie de la *Phénoménologie de la perception*, qui s'intitule « Autrui et le monde humain », Merleau-Ponty consacre nombreuses pages à l'analyse de la perception d'autrui, mais la question d'autrui n'est pas son objet principal. Celui-ci consiste à éclairer la constitution du monde culturel, c'est-à-dire la société. Or, en effet, il considèrè le monde social non comme objet de la pensée, mais comme dimension d'existence. Il revient au « social », puisque il est toujours là dès que nous existons et avant qu'il soit thématisé. Le relation du sujet au social est analysée comme sollicitation ou motivation dans le chapitre sur la liberté. Cela veut dire que la question du social pour Merleau-Ponty appartient à la problématique de la subjectivité, non à celle du monde.

Nous préciserons ensuite le sens du primat de la vie sociale. Merleau-Ponty définit la vie sociale comme « la coexistence avec un nomble indéfini de consciences ». Le primat de la vie sociale signifie donc que le relation un à un avec autrui n'est qu'un exemple spécial de celui avec des autres. Pour Merleau-Ponty, *L'invitée* de Simone de Beauvoir révèle la fonction de mediation du tiers même dans l'amour de couple.

Nous allons analyser dans la dernière partie une sorte de la violence constituitive de la vie sociale. Merleau-Ponty considèrè le sujet comme l'unité de l'existence qualifiée (l'être-pour-autrui) et de l'existence pure (l'être-pour-soi). L'expérience de l'Occupation dévoile la nature violente de cette qualification, qui n'est rien d'autre que l'objectivation du sujet dans l'histoire. Comme Merleau-Ponty le dit dans « La guerre a eu lieu », le sujet s'aliéne et se réduit à sa qualité sociale dans la coexistence avec l'armée allemande. L'examen de la vie sociale ainsi montre la primauté de la violence sur la paix dans la conception merleau-pontienne de l'intersubjectivité.

「キーワード」
メルロ=ポンティ、現象学、社会性、他者、暴力